

発行元：新島村農業委員会事務局（新島村産業観光課内） ☎（5）0284（直通）

小さな畑から始めてみませんか？



▲農協の野菜販売コーナー。組合員になって野菜や加工品を置いてみませんか？

ここ1年の環境の変化で自分の時間が増え、庭や畑で野菜を育てることに興味を持ち始めた人が増えているようです。そこで、野菜を育てて農協で販売してみませんか？自分で食べる分の野菜はもちろん、この機会に多く出来すぎってしまった作物を換金して、ちよっとお小遣いを稼ぐのも楽しいものです。

私は現在、新島で明日葉農家をしています。スタートは家庭菜園からでした。やっているうちに農業っていいなと思うようになり、子供が手を離れるのを待って、村内の

明日葉農家さんに声をかけ、換金作物として特産品の明日葉を育て始めました。

はじめは500㎡もない土地で失敗ばかりでした（それは今もありません）が、明日葉

栽培も気が付けば7年を超え、「失敗は未来の自分への肥やしになる」ということにも気づかれました。小さな1粒の種が様々なものに育っていく様子は、生命を感じ、何度見ても神秘的だと感じます。

少しでも農業に興味がある方、ぜひご相談ください。私以外にも相談場所は役場の産業観光課農林係の職員、大島支庁新島出張所にいる農業普及指導員、村の農業委員の皆さんと色々いらっしゃるので、ご連絡お待ちしております。

農業委員 天野 律子

雑草「コウブシ（ハマスゲ）」の脅威

私は今まで、畑を2枚借用していましたが、2年間作物を作らなかつた結果、雑草に覆われてしまいました。今までは草が伸びると草刈り機で刈り取っていましたが、今後は使用する予定がないので返却しようと思いませんでした。

そこで、返却前に畑の草取りをはじめたところ、畑の半分がコウブシに覆われてしまっていました。コウブシとは、別名「ハマスゲ」とも言い、防除が難しいとして世界的に有名な雑草です。芋のような根の塊によって繁殖するため、地上部だけ刈り取る草刈りでは根から再生してしまい取り除くことができませんし、冬になっても枯れない多年草です。日当たりのよ

▼雑草「コウブシ（ハマスゲ）」



いあたいたかい場所を好み、古くは根を薬として使用していたこともあるようです。

コウブシの除去には耕うん機を使用できません。というのも、耕うんで根がバラバラになってしまふと、それが子株になってしまふ更に増殖してしまいます。そのため、シャベルで一杯ずつ手作業で除去しました。

昨年11月より作業をはじめ、12月末に1枚目の畑が完了。除去したコウブシの量も45Lのビニール袋で5袋ありました。2枚目の畑は現在作業中ですが、既に1枚目の畑と同じ量を除去しています。非常に大変な作業です。皆さんもコウブシには注意してください。除去作業が大変です。



▲整地後の畑

農業委員 山下 竹夫

「レザーファン農家の現状」

農地利用最適化推進委員
横田 泰一

▼ビニールハウスの内部



最盛期には15軒ほど有った新島のレザーファン農家ですが、現在定期的に栽培出荷している農家は「弥五平（やごへい）」さん1軒になってしまいました。その弥五平さんも昨年ご主人が亡くなられ、今は奥さんが一人で栽培を続けられています。

比較的軽作業と思われるが、なレザーファン栽培ですが、1年中休むことなくビニールハウスの温度と湿度を管理しなければならず、質の良い葉を栽培するためにはこまやかな気遣いと手入れが必要です。弥五平さんでは東京に住む息子さんが定期的に来島し、ビニールハウスの補修などを手伝ってはくれています。7棟のレザーファン用ハウスを1人で管理するのは高齢の奥さんにとってかなりの重労働。最近では車の運転も心配になり「ムネムネ潮時かな」と

考えてしまうそうです。

本来、レザーファンの栽培は4年に1度ほど苗を植え替えることにより収穫量と商品価値のある葉の生産を維持することができます。しかし植え替え作業は大変なため弥五平さんの畑では13年ほど前から苗の植え替えをしていません。それでも収穫量は少し落ちたもののキレイな葉が収穫できるためそのまま続けているそうです。

昨年は「新型コロナウイルス」の影響でイベントや冠婚葬祭が自粛されたため消費の減少が心配されましたが、出荷量も価格も比較的安定的に推移し、それほど落ち込みは無かったとのこと。

新島を代表する農産物の一つであるレザーファン、30年以上続けてきたレザーファンの栽培が1年でも長く続くよう頑張ってもらいたいものです。そして次世代のレザーファン農家の誕生を期待したいと思います。



▲きれいなレザーファンの葉

趣味の農業のスヌメ

▼農作業中



初めからこんなことを言ってしまったら、真剣に農業に取り組んでいる方々に怒られてしまうかもしれません。本業の休日と趣味で農業を行っています。終業後から日暮れまで、ほぼ毎日畑にいます。ただ「やりたいこと」を「やりたいだけ」にやっているだけで、仕事終わりにサーフィンに行く若者や、釣りに出かける人たちと同じ感覚です。

両親から受け継いだ小さな畑に、常時10〜20品目の野菜を育てています。東京に住む娘に送ったり、友人知人に配ってしまふことがほとんどです。最近では農協さんのご協力で、少しずつ島内販売もはじめました。

もちろん利益はありません。それでも自分たちが育てた野菜を食べてもらえることがとても嬉しく、料理の話題や農作業を通じて人との交流が生まれたり、青空の下皆でお弁当を食べたりするのがお金に代えがたい魅力で「次はこれを植える」とか「ここに休憩場所を作る」など夢は広がるばかりです。

このような農業は珍しいわけではない、島には昔から多く存在しています。多くの

住民が島で育てた野菜を食べていると思いますし、殆どの家が農地を持っていると、内地で暮らす人と比べるとかなり贅沢なこと。日本の食料自給率の低下が問題視されていますが、新島に関して言えば作物が流通に乗っていないだけで、実はそれほど低くはないかもしれませ

ん。土いじりが楽しく、野菜が美味しく、畑が居心地良く、好きな音楽を聴きながら一日中苦も無く畑に居られる、そんな農業ライフも良いと思いませんか？ひよっとしたらあなたもそうなるかもしれません。

ちなみに、ここまで偉そうなことを書いておいて申し訳ありませんが、我が家の畑を守っているのは私の妻で、私はまだここまでの境地に達しておらず、もっぱらお手伝いの範疇に過ぎません。私自身、畑仕事はなかなか辛いですし、虫も怖いですが、野菜の美味しさには敵いませんし、妻が楽しんでいることを応援したいのです。こんな「まるみ農園」です。が何卒よろしくお願いたします。

農業委員 吉見 一之

▼まるみ農園のロゴマークと、ロゴの貼られた野菜たち

